

(別紙)

台風第11号及びその後の降雨に対する農作物管理について

農業技術課

1 作物

(1) 水稲

- ①台風第11号通過後、出穂期～登熟初期の風当たりの強かったほ場を中心に、県下各地で白穂及び着色籾が発生し、減収や品質低下が心配される。今後は、早期落水を避け、適正な水管理により収穫時まで健全な稲体維持に努めるなど、健全な籾が順調に生育するよう管理する。
- ②穂いもちの多発が予想される場合は、農作物病害虫・雑草防除基準に従い追加防除を行う。出穂後20日頃までの感染は減収に大きく影響するので、降雨が続くような場合や葉いもちの上位葉への進展が見られる場合は防除を行う。防除に当たっては農薬の使用時期等に留意する。
- ③登熟積算気温や帯緑色籾歩合により適期刈り取りを行う。

(2) 大豆

紫斑病等の薬剤防除は、生育進度に合わせて適期を逃さないように注意する。

2 果樹

(1) 共通

各品目とも、適正に新梢管理（誘引、枝つり、支柱立て等）を行い、樹全体への日照の導入及び防除効果の向上に努める。

(2) りんご

- ①収穫が始まっている「つがる」は、熟度調査に基づき適期収穫に努める。
- ②落果防止剤は適期に散布する。また、葉摘みは適期に実施し、着色の向上に努める。

(3) もも

- ①熟度が進み、生理落果や過熟果の発生が心配される。軟化しないよう注意し、適期収穫を行なう。
- ②除袋を行なった品種は、除袋後防除のあとは降雨の状況によって5～7日後（収穫前日数・使用回数に注意）にも追加散布を行い、腐敗病の発生を防ぐ。スピードスプレーヤーを園地に入れるために反射マルチ等を除いても、実施したほうが良い。

(4) なし

収穫が始まっている「幸水」は、熟度調査に基づき適期収穫に努める。

(5) ぶどう

- ①着色が遅れ、粒重、房重が伸びる傾向となる。予想収穫量を大きく上回りそうな場合は、着房量を減らして着色向上や成熟促進を図り、品質を確保する。
- ②新梢が伸び続け棚面を暗くしているため、再度摘心や副梢整理などを行い、棚面を明るくする。
- ③裂果により果汁が滴り袋が汚れている場合は、裂果粒を取り除く。

(6) 日本すもも・プルーン

降雨により、裂果や灰星病のリスクが高まる。また、スモモヒメシクイの重要な防除時期であるため、適期防除に努める。

3 野菜

(1) レタス類

軟腐病、斑点細菌病、腐敗病、菌核病等、各種病害が発生しているほか、チップバーンが発生している。今後も病害の発生が続くと予想されるので、初期からの予防防除を行う。

チップバーン対策としてカルシウム剤の葉面散布を行う。オオタバコガを主とするチョウ目害虫の発生しやすい時期を迎えるので、発生予察情報を参考にしながら防除を行う。

(2) はくさい

軟腐病、黒斑細菌病、べと病等、各種病害が発生している他、心腐れ症も一部に発生している。今後も病害の発生が続くと予想されるので、初期からの予防防除を行う。
心腐れ症対策としてかん水、カルシウム剤の葉面散布を行う。

(3) アスパラガス

露地ほ場を中心に、養成茎に茎枯病、斑点病等の病害が発生している。過繁茂傾向のほ場では、湿度が高く維持されるため病害が進行しやすい。病茎、弱茎、曲り茎の摘除を行い、適正立茎に努めるとともに、薬剤防除を行う。

(4) セルリー

転作田など排水性の劣るほ場では、湿害とともに斑点病が発生している。斑点病は草勢低下すると発生しやすいので、湿害を受けたほ場では、葉面散布で草勢回復を図るとともに薬剤防除を行う。チョウ目害虫の発生しやすい時期を迎えるので、発生予察情報を参考にしながら防除を行う。

(5) 施設トマト

側枝、下葉の摘除を行い、通風を良くして病害の発生を防ぐ。トマトはある程度の日射量が必要だが、急な晴天による日射は日焼け果や裂果の原因となるので、状況に応じて果実の遮光対策をとる。

(6) ジュース用トマト

斑点細菌病、輪紋病、疫病等の病害の発生が多いので、収穫作業の後に薬剤防除を行う。
草勢が弱く、株元付近のリーフカバー不足のほ場では、日焼け果が発生している。稲わら等による日覆いを行うとともに、葉面散布により草勢維持を図る。

(7) すいか

つる枯病、うどんこ病、炭疽病等、病害の発生が多いので、適期収穫を行うとともに病果、障害果の選別に注意する。また、果実の拭き布等の扱いには注意を払い、収穫後の腐敗果防止に努める。

(8) きゅうり

全般に側枝の発生が弱いので、側枝摘心は軽く行うか、伸びるまで遅らせる。
奇形果、病果、古葉、病葉を摘除し、草勢維持と葉の更新、側枝発生を促す。今後も各種病害の発生が続くと予想されるので、予防的な防除に努める。

(9) スイートコーン

台風等による倒伏の影響で、一斉収穫がしづらい状況となっているが、適期収穫に努め、品質確保を図る。

(10) 夏秋いちご

収穫の中休み期を迎えているほ場では、下葉、ランナーの摘除、花房整理を行い、草勢回復を図る。病害虫では、ハダニ類、アザミウマ類、うどんこ病の発生に注意し、散布ムラがないよう適期防除を行う。

日々の天候変動で要水量の変動が大きい時期であるが、養液栽培では廃液量、給液量に注意する。

4 花き

(1) 病害虫発生予防対策

長雨、日照不足等により病害が発生しやすい条件になっているため、病害虫防除の徹底を図る。特に、キク白さび病、リンドウ葉枯病、リンドウ花腐菌核病、灰色かび病等の発生に注意する。

(2) 排水対策の徹底

排水不良の圃場では、長雨による滞水で根傷みや下葉の黄化等が発生しているほ場がみられるため、明渠排水等の排水対策を図り、生育の回復を図る。

(3) 品質向上対策

- ①カーネーションのスプレー品種は、輪数不足や軟弱化するなど日照不足の影響を受けやすいため、曇雨天時は、遮光資材を格納して施設内の光量を確保する。併せて、不要な芽や側枝を整理して、株元の通風を高めるとともに光が届くよう配慮する。
- ②トルコギキョウの八重系品種は、日照不足の影響によりブラスチング（蕾の生育停止）の発生が特に多くなるので、活着後は早期に遮光資材を格納して、施設内の光量を確保する。なお、遮光を継続する場合は、遮光率の低い資材を用いる。

5 飼料作物

飼料用とうもろこしで、日照不足により生育の遅れが目立つ場合は、収穫予定を立てる前に必ず雌穂の熟期を確認し、適期収穫に努める。